

FDニュース

発行日 2015年 11月4日

目次：

- 国際関係学部の学生FDリーダーに聞く 1
- 第7回NU-CEFR研究会の紹介 2
- 国際グッドプラクティス 3
- H26年度後期授業アンケート集計結果について 4

1 国際関係学部の学生FDリーダーに聞く

今年度、本学部において学生FDワーキンググループが設立されました。日本大学全体では、学生FD団体が設立されるのは、文理学部に続いて2例目となります。10月2日には、学生FDの主催で学生・教員・職員が自由に大学について話し合う第1回「しゃべり場」が開催されました。今回、リーダーとして学生FDを引っ張る建部弘輔さん（国際総合政策学科3年）に日々の活動や「しゃべり場」の開催について話を聞きました。



「しゃべり場」の風景

Q1：国際関係学部において学生FDワーキンググループを立ち上げるきっかけを教えてください。

建部弘輔：学生FD CHAmiT2014に参加したことがきっかけです。他学部との交流が楽しそうだと思う、学生FDに興味を持ちました。

Q2：現在は何人で活動していますか。日々の活動についても教えてください。

建部：現在のコアスタッフは国際関係学部の3、4年生4名です。最初の仕事は、学生・教員・職員で色々なことを話し合う「しゃべり場」を開催することでした。第1回目は10月2日に無事開催できました。今年度中にとあと1回開催したいと考えています。

Q3：第1回目「しゃべり場」のテーマは、「私たちのキャンパスをもっと国際的なにしたい人！集まれ！」でした。このテーマを選んだ経緯を教えてください。

建部：このテーマを選んだのは、メンバーから、国際関係学部ではたくさんの留学プログラムがあるにもかかわらず、そうした留学情報を知らない学生が多いという声があがりました。テーマを留学だけに限定してしまうと話し合いの範囲が狭くなるので、留学だけでなく、日頃の三島キャンパスライフをもっと国際的にできないだろうかということで、今回のテーマに決めました。

Q4：第1回目「しゃべり場」の様子について教えてください。

建部：今回は金曜日5限の時間に開催しました。具体的

には、参加者がグループに分かれ、それぞれ模造紙に意見を書いたポストイットを張り付け、最後にグループごとに発表するというワークショップ方式で実施しました。学生の多くが学部3年生でしたが、学生、教職員を合わせて全部で17名が参加してくれました。いきなり話し合いを初めてもうまくいかないので、最初にアイスブレイクのための時間をとり、参加者が「マイブーム」を紙に書いてそれを互いに紹介・発表しました。色々なマイブームが発表されて、場が和みました。ワークショップ「しゃべり場1」では、まず、「インターナショナルとは何か」について意見集約を行い、そのあと「しゃべり場2」として、「（国際関係学部を）インターナショナルな学部にするにはどうすればいいか」について意見を出し合いました。例えば、「大学の授業をインターナショナルにする」、「異文化理解のための授業や文化についての授業を増やす」、「留学生をもっと受け入れる」、「在学生と留学生の交流の場を増やす」、「留学の必修化」など、色々なアイデアが出ました。珍しいものには「スタディエリアに外国の先生がいて、そこに行けば常に英語が喋れる場所が欲しい」という意見もありました。

Q5：今後の抱負を教えてください。

建部：今回のしゃべり場は成功だったと思います。次回以降は、2年生にもっと参加して欲しいと思っています。また、短大生の参加も期待したいです。

（文責：FD委員大西富士夫）

2 第7回NU-CEFR研究会の紹介－複言語教育の現場から

平成27年3月3日、国際関係学部において第7回NU-CEFR研究会が開催されました。NU-CEFR研究会は、日本大学所属の教員を中心とした、欧州共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment)を言語教育の場に活用すべく検討を行う研究会です。今回の研究会では本学部で外国語を使用した科目を担当されている先生が外国語教科の問題点や工夫等について報告しましたので、その概要を紹介させていただきます。

トピック1：CEFRについて

まず、研究会の概要をお伝えする前に、CEFRについてご紹介させていただきます。CEFRとは、戦後、欧州評議会で開始され、発展してきた言語政策です。CEFRの理念は、複言語主義と呼ばれ、多言語主義とは区別されています。複言語主義では、個人が社会生活を営む中で必要となる外国語学習を促進するため、言語知識能力を身につけることに主眼がおかれています。CEFRは、個々人生活上の必要性にたった上で、多様な習熟度の基準を示すもので、欧州諸国を中心に世界で幅広く普及しています。日本においても、各大学においてCEFRを導入する動きが広がっています。NU-CEFR研究会は、日本大学において外国語授業を担当される先生方を中心として、複言語教育の向上に向けた研究報告を提供する場となっています。

第7回研究会では、CEFRに関連した研究報告に加え、国際関係学部での開催ということもあって、外国語を使用して授業を行っている本学部の先生方が日頃の授業の様子、今後の展望などについてパネルディスカッション形式で話し合いました。

トピック2：研究報告（午前の部）

本学部の杉本宏昭准教授（英語担当）、橋本由紀子准教授（フランス語担当）、真道杉准教授（ドイツ語担当）が「2言語履修の学習効果について－学習習慣からみた学習効果に関する調査から」と題し、2言語教育の相乗効果に焦点を当てた報告が行われました。報告者の各先生は、自身の担当する外国語授業を通して、2言語学習の学生を対象に意識調査や学習習慣についての自己評価アンケートを実施し、それを踏まえて、英語-ドイツ語、英語-フランス語の2言語学習では、特に学習到達速度が高い学生等において、学習の相乗効果が観察されることが報告されました。また、複言語学習学生の方が単言語学習の学生よりも評価が高くなる傾向があることも報告されました。

トピック3：パネル・ディスカッション（午後の部）

午後からはパネル・ディスカッション形式での報告が行われました。まず、小林和歌子助教（日本大学文理学部）より、「第二言語テストにおける自己評価」と題し、第二言語学習の成果についての学生の自己評価上の意義、課題などについて報告がありました。次に、本学部の八塚春名助教から「初級スワヒリ語の教授計画－『使える』スワヒリ語を楽しく学ぶ」と題して、スワヒリ語や（7千万人の話者がいる）ス

ワヒリ文化圏の紹介、スワヒリ語授業で目標とされる到達点、テキストの紹介、授業の進め方などについて報告が行われました。報告の中で、スワヒリ語と日本語の辞書が1冊しかなく、大変高価なため、授業には不向きであるといった問題点、また、最初の難関として名詞等の格変化の複雑さなどがあるとして、工夫が必要であると報告されました。学生には、難解な文法にこだわりすぎず、間違いを恐れずに会話を楽しみながら「使える」スワヒリ語を学んでほしいこと、また、言語を通じて、アフリカ地域への関心をも高めて欲しいといったことも述べられていました。

その後、本学部の小川直人准教授が「日本人に必要な言語・コミュニケーション教育とは？」と題して報告を行いました。報告では、日々の生活の中で英語を使用することが少ない現状において、英語中心の外国語教育に対する学習の動機づけが難しいとして、言語教育の発想を変えていく必要があるのではないかといった問題提起がなされました。発想の転換の1つとして、日本を訪れる外国人の多くは台湾、韓国、中国といったアジア諸国からであり、そのため日本国内においては英語話者よりもアジア諸国の言語の話者が求められており、英語中心の言語教育から、実社会の要請に基づいた外国語カリキュラムにシフトする必要があるのではといった点も指摘されました。

4番目の報告には、本学部の大川英明教授より、「英語での専門授業に関して：日本事情」という報告が行われました。報告では、大川先生がご担当されている国際文化論入門の授業の紹介の後、工夫点や課題などが報告されました。工夫点として、予習に適したテキストの選定や、グループ学習による理解度の確認を丹念に行っていることが挙げられました。パネル報告後、参加者の間で活発な議論が行われました。

取材へご協力をいただきました諸先生方、有難うございました。
(文責：FD委員大西富士夫)



研究会の風景

3 国際グッドプラクティス

今回は、国際関係学部の大川英明教授の「国際文化論入門」と、短期大学部の葛城裕美准教授の「臨床栄養学実習」の授業にお邪魔しました。両先生共に、双方向的な授業を展開されており、大変活気のあるクラスでした。

① 大川英明教授「国際文化論入門」

授業レポート(大西富士夫助教):この科目は国際総合政策学科の英語特別クラス対象の基礎科目(1年次必修)で、日本文化を英語で学ぶという内容です。教室にお邪魔すると、スクリーンには座席表がファースト・ネームで映し出されていました。授業冒頭、後期が開始したばかりということもあり、学生のヒアリング力を確かめるように、世間話などで英語で学生に質問し、学生がそれに元気に答えていたのが印象的でした。発言をした学生は、ポイントが加算されるとのことで、何回も手を挙げて積極的に発言する学生もいました。

大川先生の国際文化論入門は、毎回授業で扱う内容を学生が予習してくる事前学習が義務付けられており、予習で整理してきた内容を元にグループごとに作業を行い(クイズに答え)、それをグループごとに発表するというローテーションが組まれています。発表者も同一人物に重複しないように、事前に指定されていました。進め方は、米私立大で教えられたご経験を元に練り上げられた対話式となっているのが特徴的でした。学生が毎回予習をしてくる内容もテキスト2頁程度であり、テキストには語彙や課題文の解説が掲載され、学生の予習に費やす時間もそこまで負担の大きなものにはなっていません。一般的に、専門科目等の英語授業では、同科目の日本語クラスとのバランスもとる必要があり、テキスト選びが大変ですが、大川先生のテキスト選びは、学生による自習を補助する教材であることに主眼において選定されているとの印象を持ちました。

大川先生の授業でもう一つ際立っていたのは、解かり易いパワーポイントによるスライドを使用していることでした。各スライドには、過度に情報を盛り込まず、また、平易な英語での質問や図解が表示されていました。こうした丁寧なスライドづくりには、大変な時間と労力がかかると予想されますが、学生を飽きさせず、授業の進行についてくることのできるような様々な工夫が至る所に施されていました。

先生の人柄もあるのか、授業は終始和やかな雰囲気が進み、また、学生からは活発に発言が飛び交う授業でした。楽しい授業の運営は、極め細やかな学生への気配りと労を惜しまない授業準備によって支えられているものと実感しました。



② 葛城裕美准教授「臨床栄養学実習」

授業レポート(大西富士夫助教):今回お邪魔させていただいた葛城裕美先生の授業は、短期大学部の専門教育科目で2年次対象の通年授業です。本授業では、疾病者の個々の栄養状態に応じた食事を提供する栄養ケアに必要な知識と技術を習得することが目標となっています。

臨床栄養学実習は、3限から5限まで通しで行われ、教科書の解説を中心とする講義と理解度を確認するための実習とが組み合わされていました。お邪魔した4限には、食事の塩分を減塩する方法についての講義と、減塩するための献立修正の演習が行われていました。

学生の机の上には、何冊もの資料があり、扱う情報量の多さに正直驚かされました。また、市販のテキストには学生の習熟度に適したものが無いとのことで、葛城先生が独自に作成された手作りテキストも配布されており、工夫が凝らされていることが伝わってきました。また、講義の間、私語をしている学生が一人もおらず、様々な色の蛍光ペンでテキストや資料に線を引くなど、授業に集中している様子がとても印象的でした。

実習の課題が出題されると、学生は、一斉に計算機を使って計算を行い、課題が出来上がった学生から、教卓の葛城先生のところに一列に並んで添削してもらっていました。もうひと息となった学生は、とても悔しそうな顔をして机に戻って再度課題に取り組み、また、OKもらった学生の表情には笑みがこぼれていました。葛城先生は学生の意欲を引き出すために様々な工夫をされており、例えば、5種類の色のシールを用意し、学生が課題を1つクリアするとシールを渡していました。学生は、自分の学習の到達度がシールを見ることで一目でわかり、それが学習意欲につながっているようにみえました。

また、これも印象的でしたが、課題で学生が行き詰まっていると、助手の方が学生にアドバイスやヒントを与えてサポートしており、教員間において綿密な計画と打ち合わせに基づいた組織的な授業の運営が行われていると実感しました。



4 H26年度後期授業アンケートの集計結果について

表1 国際関係学部授業アンケート科目別結果



表2 短期大学部授業アンケート科目別結果

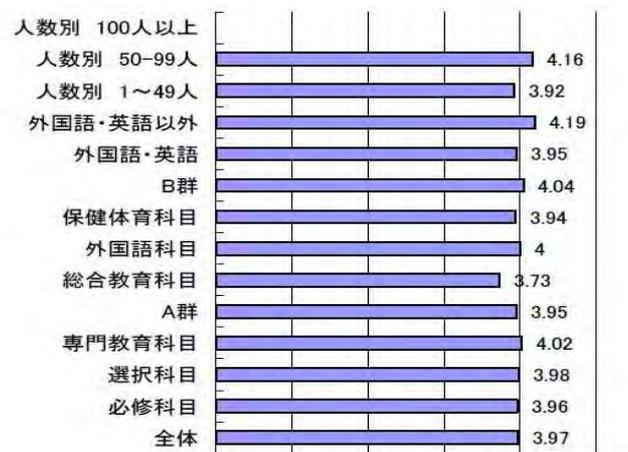
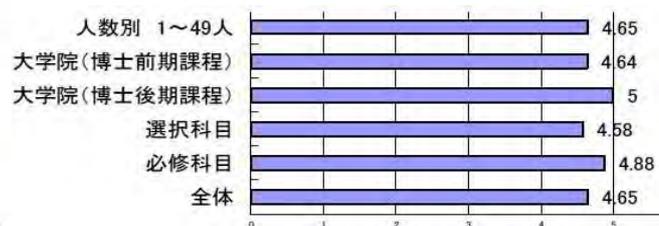


表3 大学院授業アンケート科目別結果



アンケート結果をお届けするのが大変遅くなり、お詫び致します。今後は出来るだけ早くお知らせできるように努めますので、今後ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成26年度後期の授業アンケートは表1から表3にある通りの結果となりました。各授業担当者が授業評価の詳細を参照し、授業改善に役立てていただければと思います。国際関係学部授業評価アンケートのH26年度後期の全体の平均が4.05でした。経年変化をみると、H22年度後期が4.3、H23年度の前期が4.17、後期が4.22、H24年度の前期が4.22、後期が4.3、H25年度前期が4.24、後期が4.32、H26年度前期が4.02と変化しています。後期の方が平均点が上がる傾向がみられますが、全体の推移としては、ほぼ横ばいといって良いでしょう。

短期大学部の平成26年度後期授業アンケートの全体平均は、3.97でした。経年変化をみると、H22年度後期が4.1、H23年度の前期が4.0、後期が4.16、H24年度の前期が4.14、後期が4.24、H25年度の前期が4.24、後期が4.2、H26年度前期が3.91と変化しています。短期大学部も後期の方が平均点が上がる傾向がみられますが、H26年度前期以降、平均が4を下回っている傾向が続いています。大学院は受講者数も少なく、授業形式も異なるにも関わらず、項目が学部生と同じで無理があります。前回アンケート実施時と同じ反省点となりますが、大学院のFD活動の再考が迫られています。

個々の結果を見ると、大人数授業と、専門基礎科目、必修科目などで評価が低い傾向があります。この傾向は変わっていないために、こうした科目への支援と対策が引き続き必要です。

また、平成24年度の後期から試験的にアンケート入力Web化に取り組んでいますが、アンケートの回収率の観点から、引き続き紙でのアンケート回収も継続することになりました。担当教員は学生が回答しやすい形式を選んでいただき、結果を回収してください。

最後に、日本大学の本部でも一層、FD活動に力を入れております。前号に引き続き、本号でも取り上げましたが、日本大学においても教員だけでなく学生FD活動がはじまっています。教員と職員と学生が一体となって、より豊かな大学教育が実現できればと願っております。

(FD委員会)